特定非営利活動法人 マザーハウス会報（2015 年 1月15 日創刊）

No.31

マザーハウス たより

あなたは愛されるため、また、愛するために生まれてきたのです。

あなたが必要であり、大切です。マザーハウスはあなたの家族です。

2017 7月号

近々出所される方は、ご一報ください。

スタッフ一同、社会復帰をお祈りしております。

このマザーハウスたよりは、公益財団法人日工組社会安全研究財団の助成より作成したものです。

《 表紙 》

T刑 Y・Tさん

＊無題の文章には題名をつけさせていただきました。

＊イニシャルは、苗字・名前の順です。

２　理事長挨拶
４　社会の声
１０　Lovely　DAYs
１１　ささきみつおコーナー
１２　心の相談室
１３　塀の中のたより
１７　育児日記
１８　風の配達する手紙
１９　行事予定

インターネットのイラスト引用元：

Created by Freepik、Created by Irikul - Freepik.com、Created by Kostolom3000 - Freepik.com

理事長挨拶

遅めの梅雨の気候が続いていますが、皆さま、いかがお過ごしでしょうか。
『青少年問題』第 667 号に私の文章が掲載されました。感謝です。その中で、少年と関わって感じたことについて書いた部分を、紹介させていただきたいと思います。

現場から見た青少年問題
ー 闇から光へ ー

少年院・刑務所にいる人の多くが、家族から見捨てられ、絶縁状態にあります。悪いのは犯罪の道を選んだ本人ですが、その背景には、幼少期の生育環境の影響があると感じます。家族との間での愛や赦し、絆が欠落しているのです。孤独は、人間にとって、特に子どもや少年にとって、最もつらく、厳しいことだと思います。

マザーハウスの活動を通して少年たちと関わる中で、愛情不足の少年がとても多いと実感します。彼らは心に大きな傷を持ち、大人を全く信用していません。どんなに愛情を持って接しても、生活の面倒をみても、彼らはあっさりと裏切るのです。彼らには人の愛情が通じず、また、彼ら自身も人を愛することを知りません。
彼らがそのように育ったのは、家族や両親が子どもと向き合うことをせず、子どもの叫び声を聞かず、SOS のサインを見ようとしなかったからだと思います。そのため、子どもは大人を信用しなくなり、「助けて」と叫ぶことができなくなります。大人と信頼関係ができていれば、子どもは安心して「助けて」と叫べます。家族が子どもと真剣に向き合っているならば、子どもが発信する SOS が分かるはずです。子どもの異変をすぐに感じ取ることができるはずです。

家族だけでなく、学校の教師にも同じことが言えます。子どもと触れ合う機会が多い大人が、子どもと向き合うことをしなければ、子どもたちが「助けて」と叫べる社会は実現しないと思います。「助けて」を言えなかった子どもたちが、やがて非行や犯罪に走り、少年院・刑務所を経ても回復せず、何度も再犯を繰り返しているのです。
大人が子どもの話を聞き、注意ばかりするのではなく、肯定して受け入れることが必要なのです。

親からの愛情に飢えて、どんなに冷たくされても親の愛情を信じ続ける少年もいます。
ある少年審判で出会った少年は、母親の愛情を非常に求めていました。しかし、母親は都合の良い時にだけ少年を呼び出し、呼ばれた少年は嬉しくて母親の元へ行くのですが、用事が終わるとすぐ、母親は少年に立ち去るように言うのです。それでも少年は、何かあれば母親が助けてくれると信じていました。彼には、母親の本当の姿を理解することができなかったのです。
少年院生活が長く、社会での経験がないことで、自分の置かれている状況を考える力が全くありませんでした。審判のとき、私が「自分を変えるために、真剣に自分と向き合いなさい。それをしなければ犯罪からの離脱はできないです」と言ったにも関わらず、最後に裁判官から質問されたとき、彼は「どうすれば自分を変えることができるのですか」と聞いたのです。審判のときに、調査官や弁護士、私が言った言葉の意味が理解できていなかったのだと思います。

以前、彼は私に「少年院の教官は自分の言ったことを聞いてくれず、上からものを言ってばかりいる」と言ったことがあります。
私は、「『教官、僕はこうなりたいのです。こうしたいのです。どうすれば良いのか教えてください』とお願いをしなさい。それについて教官が何も指導してくれないのであれば、『教官をやめたらどうですか』と言えばいいと思う。そのことで規律違反行為として処分を受けたとしても、自分の知りたいことや教えてほしいことはとことん聞くことが大切であり、それによって自分を知り、自分を変えることができるのではないか」と伝えました。

少年は母親の愛を異性に求め、異性に依存し、性行為をすることが愛だと思っていました。でも、そのような愛に癒しはありません。ただ性的欲求を満たすだけであり、自分が大事にされている、必要とされている実感は得られず、

心は満たされないのです。だから、どんな異性と付き合っても、どんなに異性と性行為をしても、何も変わらないし、彼の心は空洞のままであると思います。

彼が変わるには、親との関係をきちんと修復しなければなりません。親との関わりを一定期間断絶し、正しい親子関係がどういうものであるのかを親も子も学ぶ必要があると思います。また、彼には、自分のことを正直に言える人が必要です。

少年院や保護観察所、家庭裁判所の裁判官・調査官にも問題があると思います。自分たちの考えだけで行動し、当事者の声を聞こうとしない方が大勢います。

以前、ある家庭裁判所から、試験観察となった少年をマザーハウスが受け入れ、サポートをすることになりました。

彼を地元から離れさせ（地元には、一緒に悪さをしていた仲間がいるため、地元に戻った人はほとんど再犯に走ってしまいます）、人との関わりを持たせるために、マザーハウスで支援している当事者の仲間の近くに住まわせましたが、なかなか仲間に溶け込もうとしませんでした。裁判官が彼から携帯を没収せず、使用させていたからです。それで彼は昔の仲間に連絡を取ることができ、休みの日には遊んでいました。

ある日突然、彼は無断外泊をし、警察から私に連絡が入って、引き取りに行きました。その後、彼から「地元に帰りたい」という話をされましたが、反対をしました。でも彼は調査官に話をして、裁判官から許可を取りつけました。私は家庭裁判所に猛抗議しましたが、全く聞き入れてくれませんでした。

その結果、少年は無免許でバイクを運転し、後ろに乗っていた女性と共に大事故を起こして、現在は入院して手術を繰り返している状況にあります。家庭裁判所が、当事者であり彼の身元引受人であった私の話を真剣に聞かず、少年を地元に帰したのが今回の事故の大きな原因であると感じています。

事故の後、少年の住宅のことなど、弁償しなければならないことが多数あり、私はあちこちに頭を下げに行きました。そしてそのことを家庭裁判所の調査官に話しましたが、他人事のように「お金のことは関与できません」と言われ、自分たちが下した判断には責任をもたないのか、と憤りを感じました。

裁判官も調査官も、真剣に少年と向き合っていなかったと思います。少年の過去の行動を調査すれば、地元に帰したら昔の仲間と関係を持つことは十分想像できたはずなのに、何の防止策も取らず、聞いてはいけない少年の訴えを聞いたのです。彼らは本当に少年の回復を望んでいるのか、今でも疑問でなりません。

私なら絶対に地元に帰さず、遵守事項の中に携帯電話の制約を課し、以前使用していた携帯を初期化して渡すことにします。「甘やかす」と「助ける」は違うのです。少年や受刑者と向き合うには、「甘え」を断り、「助け」を受け入れなければなりません。

青少年問題においては、当事者の叫び声を社会がもっと聞くことが大切です。当事者の話を聞くことが、少年たちの問題の解決につながると思います。

当事者としての実体験がない人たちがどんなに立派なことを言っても、当事者たちの心には響きません。実体験のある人が話すから心に響き、問題解決の気づきを得られると思います。

遠くの人を愛することは簡単ですが、目の前の人を愛することは難しいです。なぜなら、関わるからです。私たちは、遠くの人の支援をする前に、身近な人や子どもたちに十分な愛情を持って接することができているか、改めて考えなければなりません。一人ひとりが身近な人を大切にすることが全ての基本だと思います。

子どもたちが「助けて」と言える社会を実現するために、これからも、私は仲間と共にマザーハウスの活動に尽力する所存です。お読みくださり、ありがとうございました。

以上です。

支援者の皆さま、自分の思いで相手を変えようとするのではなく、当事者の叫び声を聴いてください。回復するのは当事者自身なのです。

受刑者の皆さん、何回も何回も同じことを言いますが、ぜひ回復プログラムを実践してください。私は皆さんとともに歩んでいきたいと思っています。マザーハウスが皆さんの居場所となれば幸いです。

社会の声

加害者家族の現状

（講師：阿部恭子さん）

＊ 2016 年 10 月 8 日の VIP プリズムでの講演です。

阿部恭子さんプロフィール

NPO 法人 World Open Heart 理事長（理念:「マイノリティでもこわくない」社会構築に貢献！）。

東北大学大学院法学研究科博士課程前期修了（法学修士）。2008 年、大学院在籍中に、社会的差別と自殺の調査・研究を目的とした任意団体 World Open Heart を設立（2011 年に NPO 法人格取得）。宮城県仙台市を拠点として、全国で初めて、犯罪加害者家族を対象とした各種相談業務や、同行支援などの直接的支援と啓発活動を開始し、全国の加害者家族からの相談に対応している。

著書『加害者家族支援の理論と実践―家族の回復と加害者の更生に向けて―』（編著、現代人文社、2015）、『悲嘆の中にある人に心を寄せて――人は悲しみとどう向かい合っていくのか』（分担執筆、上智大学出版、2014）、『交通事故加害者家族の現状と支援―過失犯の家族へのアプローチ』（現代人文社、2016）。

はじめに

五十嵐：

私と阿部さんとの出会いは、僕が母親のことでとても悩んでいたときに、妻の亜利沙がホームページを探して、「こういう方がいらっしゃるよ」と教えてくれたんですね。それで、いきなり阿部さんのところにお電話して、阿部さんが東京に来られたときにお会いして、「僕は加害者で、母親のことで悩んでいる」と相談させていただいたことがきっかけで、その後交流をさせていただいております。

今日は、阿部さんから、なぜ加害者家族の支援を始めることになったのか、また、加害者の家族の現状をお話ししていただこうと思っております。

＊以下、阿部さんによる講演です。

加害者家族の定義

皆さん、「加害者家族」という言葉を聞いたときに、どんなことを思い浮かべますか。

私が活動を始めた 2008 年当時、「加害者家族」という単語はありませんでした。この単語は誰が作ったかというと…2010 年に「クローズアップ現代」という番組で私たちの活動を取り上げていただいたとき、鈴木伸元さんという、当時 NHK のディレクターだった方が、そのときの取材を元に執筆した本のタイトルが「加害者家族」なんですね。

私たちはそれまで何て言っていたかというと、「犯罪加害者家族」と言っていました。それで、「犯罪」を取って、「加害者家族」。この言葉が、ネット上なんかで社会的な単語になってきて、私たちの団体に繋がるときも、「加害者家族」っていう単語をキーワードで検索して繋がってもらっています。

World Open Heart（以下、WOH）としては、相談者のデータからまとめて、「加害者家族って、こういう人なんだよ」ということを世の中に定義していきたい。それで、現状に合った定義というものが今、できてきました。

逮捕の前に捜査される任意捜査というものがありますよね。この、トラブルが起きたその直後、という段階も結構扱っているんですよ。まだ罪名がついてない状態で…そこから加害者家族支援がスタートする。世界的に言っても、加害者家族支援という枠の中で言ったら、「受刑者」家族支援が主流なんですけれども、WOH での加害者家族支援は、判決が確定する前の段階に焦点を当てた支援が特徴ですね。これは実際、加害者家族が非常に困るのが、逮捕前後だということです。

なので、私は著書の中で、「加害者家族とは、犯罪の行為者ではないにも関わらず、行為者同様に社会から非難され、差別される人々」というような定義を作っております。実際、そういう人なんですね。

現在まで、600 件以上の色んな加害者家族の支援をしてきました。いじめとかハラスメントっていうケースもあれば、殺人事件まで…それも、被害者が 1 人ではないケースもある。こうした加害者の家族がサポートを受けられるところがないんですね。それゆえに、WOH は支援をしていかなければいけない。「加害者」っていう言葉はとても便利でですね、こうした、別に被疑者や受刑者ではないけれど、もしかしたら、被害者からみたら加害者かもしれない…そういった、全ての非難され得る人と同じように見られて、差別されやすい家族、ということで、私たちは「加害者家族」という定義をつくりました。

とにかく、相談いただいていいですよ、ということです。ちょっと困っていて、そんなに大きい事件ではないけれども、本当に自分の身の回りから責められていて、とても息苦しい…そういう方はぜひご相談ください、という意味で、広く「加害者家族」支援という言葉を使っております。

意外と身近に困っている人がいる

私は、10 代の初めから色んな人権活動に参加していたんですけど、すごく私が憧れていた初恋の先生がいて、その先生が、外国籍市民の子どもとか、貧困状況にある人のサポートに関わっていて、私も先生と一緒にそういう活動に参加するようになったんです。初めは、先生の追っかけというかんじでついていって、本当に色んな方と接することになって、マイノリティっていう立場を知ったわけです。

私自身、家庭の中でそんなに問題があったわけではなく、割と普通に育った方だとは思います。学校とかでも、同質的なコミュニティというか、そういう中で育ちました。私はすごく本が好きで、世界の状況は本の中では知っていたんですけれども、本当にそういうことが世の中にあるのかなということは思っていて。自分の、割と平凡なコミュニティの中にいることが、ちょっと退屈だなという思いはありました。それで、その先生と出会ったときに、すごく世界が広がるようなかんじがして…あとはやっぱり、意外と身近に、すごく困っている人がいるんだっていうことも、そこで初めて分かっていくわけですね。

すごくショッキングだったのが…私は大学院でマイノリティに関する権利の研究をしていて、「社会的差別と自殺」というテーマを扱っていたんですけど…マイノリティと言われる人の中で、自殺に至るケースが非常に多いです。

私の好きだった先生のお友達とかにも自殺をしている人がいます。今でも忘れられないんですけれども、先生のお友達で、「また会おうね」みたいなかんじでお別れをして、それからしばらくして「先生、あの方いないよね」ってなったときに、「実は亡くなって、自殺だったんだ」っていうお話が…初めて聞いたときに、すごく、「会えなくなるんだ」っていう、死っていうものをすごくリアルに感じたんですね。ああ、会えなくなるんだ…って。で、やっぱり、背景にどんなことがあったんだろうとか、あの時に自分ができたことはなかったのかとか、そういうことはすごく考えました。

そういう悲劇はその時だけにとどまりませんでした、残念ながら。何回もそういう経験をしてしまったんです。知ってる人がいなくなってしまうっていう。その人たちは、社会的にマイノリティだったっていう共通点があって、何とかできないのかなってことを、すごく私は思っていたんですね。

作者：T 刑 Y・T さん

何よりもまず、当事者が明日生きていけるように

私が好きだった先生も、色んな人権系の活動をされてはきてるんですけども、私の中で若干疑問だったのが、人権団体というと、国に対して「何かおかしい」「制度がおかしい」ってことを提言していこう、っていうことがまず中心になりますよね。それは必ず必要です、やらなければいけない。ただ、それにはパワーも要るし、メンタルも強くなければいけない…。

例えば、いじめられてて学校に行けない子どもがいるとします。確かにそれは世の中が悪いですよ。制度が悪い。学校が悪い。何とかしよう。それは大事だけれども、でも、まず「この子の明日どうするの」って。学校行けなかったら、家にいたら親御さんに怒られる。この子どうしよう。やっぱりその子を預かったりとか、今で言うフリースクール的なことをまずやっていかないといけないんじゃないかと。

世の中が悪くて、それに対して世の中を変えていくんだっていう活動に何か焦点が当たりすぎてるって、私は思ったんですよ。もっと当事者を、まず、明日生きていけるようにしていく、ということをもっとしていきたい。将来的にも、そういう、ケアを大事にする人権団体をやりたいなあというのが、すごく私の中で思ったことですね、10 代からずーっと。

それで、とにかく色んな活動に参加して、そういう中で悲しい出来事がたくさんあって。それを繰り返したくない、そのために何をすべきかと…そこで出した答えが、「ケアと人権」。これを守る活動なんですね。それで、大学院にいたときに、「社会的差別と自殺」の調査をしていたわけですよ。

2006 年に、自殺対策基本法ができました。自殺って、個人的な問題と捉えられがちだったんですけれども、自殺者が 3 万人くらい出てましたから、国も、もう個人の問題だけじゃなくて、きちんと乗り出していこうということで、各地に窓口なんかができていたんですね。

2004 年には、犯罪被害者等基本法もできましたね。私、大学院にいたときも、たくさん被害者に関する論文も見ておりました。「あ、こうやって被害者の権利というものも、また新しい人権として認められてきたんだ」と、ちょうど思っていたところですね。

その一方、加害者の家族という人もいますよね。私の住んでいる地方でも、犯罪を犯した人の家族が、自責の念から自殺をするっていうケースが結構出ていたんですね。これは、全国的にも、重大事件の加害者の家族が自殺をしてしまったという例はありました。珍しい例じゃなくて、何件か起こっているんですね。起こっているんですけれども、じゃあこういう人たちはどこに相談に行けばいいのかってちょっと思って。それで、そういう自殺対策の窓口を尋ねました。

「犯罪者の身内の人が相談できるところはありますか」と尋ねたところ、「いや、ちょっとそういうところは弁護士さんとかじゃないですか」って言われたんですよ。で、加害者家族に対応する窓口が全く無かった。それで、作らなくてはいけないんじゃないかということで、いろいろ調査を始めたんですね。

作者：sweet 苺さん

加害者家族支援へ導かれて

ちょうど、2007 年から 2009 年くらいまで、私は東北大学大学院の法学研究科にいたんですけれども、まさに神様が「あなた加害者家族支援をしなさい」って言っているような、今思えば、そういう人たちにたくさん出会っていくんですよ。

今も相談させていただいている S 先生っていう先生がいて、地域と大学と一緒に色んなことをするっていう、結構珍しいことをやられる先生だったんです。私も S 先生のゼミに入って、「自殺」っていう問題をテーマにフィールドワークをやったことが、WOH の活動の一番初めだったんですけれども、S 先生が、社会病理学という授業の中で加害者家族のことを扱ったんです。

皆さん、東野圭吾さんという作家さんはご存知ですか。東野圭吾さんの「手紙」っていう映画があるんです。小説もあります。これは、自分のお兄さんが殺人を犯してしまって、その弟が、お兄さんの影響で結婚がダメになったり、仕事がダメになったり、家に住めなくなったり、いわゆる社会的制裁を受けてしまう。そういうストーリーなんですね。

S 先生が、授業でその映画をテーマに使いまして、身内に犯罪者がいることで、こういうことが起きると。それで、「こういう社会の病理を、誰が、どうやって解決したらいいんですか」っていう問いを出されたんですよね。皆さんはどう考えますかね。ゼミでは色んなアイデアが出ました。弁護士や司法の領域なんじゃないかとか…ただ、そんなに活発な議論にはならず…。

私は、たぶん、その加害者の家族たちに、行政側からアプローチするのはちょっと難しいんじゃないかと思ったんですね。こういうことこそ、まさに NPO とかがやるべき領域なのではないか、という考えを出しました。ただ、ここで「私がやる」って決めたわけじゃないです。単に映画の話だったので。このときに、犯罪者の家族ということで、実際自殺も起きていると知って、私を調査に向かわせるモチベーションになっていたんですけれども。

調査にあたって、情報が無かったので色んな人に聞きました。刑事弁護士とか、保護司さんにも伺いました。「加害者の家族とお会いになったことはありますか」「加害者の家族はどういう風な生活をされているでしょうか」と伺ったんですけど、皆さんおっしゃったのが、「お会いしたことは何回かありますが、私たちの仕事は被疑者や元受刑者を支援することなので、深く接したことはないんです。なので、実情が分かりません」って。「加害者家族の支援は非常に意義があるんじゃないか」とも言っていただきました。

私も、とにかく自殺者が出ている以上、何かしらやらないといけないのではないかと思って、薬物のダルクさんに伺ったりとか、「非行」と向き合う親たちの会を訪問したりとかして。

当時、メンバーは私たち学生が中心だったので、まだ未熟ですけれど、できないことはないか模索して、お金が無い中で精いっぱいできることとして、グループミーティングというのがあったんですね。会場を設定して、closed（＝閉鎖的な場）で当事者が語り合うという、秘密をオープンにできる場所を定期的につくって当事者の声を聞いていく、というのが始まりでした。

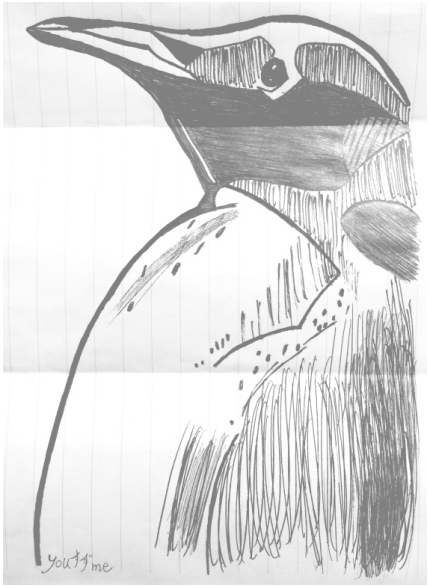
私はそういう支援をやるというときに、怖いという感覚はありませんでした。とにかく、「やらなければ」という気持ちの方が強かったですね。それで早速、「この日にミーティングをやりますよ」っていうお知らせを市民センターに置いたんです。タイトルは、今から考えると露骨なんですけど、「犯罪加害者家族の集い」っていう、やっぱり普通の人が見たら「えっ」て思うかなっていう。ただ、土地柄なのか、特に批判を受けたりとかは全く無かったです。

すぐに地元の記者さんから連絡がありまして、「これはどういうことですか。すごく珍しいんですけど」ということで、取材を受けました。それで、「私たちはまだ中身が詰まっているわけでもないし、現状も分からないんですけども、こういうことをやっていきたいんです」ということをお話ししたら、それを夕刊に載せていただいたんですね。

そしたら、その翌日、全国から電話が殺到しまして…本当にびっくりしてしまいました。私はまだ準備段階の時点で、「私この加害者家族支援をしていくんだ」という気持ちが固まっていたわけではないんですよ。ただ、本当にものすごい件数が来てしまって、そこから「もうやらなければならない」というかたちになってしまったんですね。かかってきた電話の半分は当事者、半分はマスコミでした。それで、こうした活動が日本には無いっていうことを初めて知りました。まさかどこかにはあるんじゃないかなとは思っていたんですけれども。

加害者家族からかかってきた電話が、すっごく心痛む内容で、「本当に今まで私たちがどんな思いで生きてきたか」と。「私たち支援を受ける対象なんて思ったことがなかった」「助けてほしいって思ったけど、それを言ったらたぶん、違うんじゃないか、責められるんじゃないかって思って、本当に息を殺すように生きてきました」「こういう団体ができたことで、すごく今息を吸えた思いがします」ということを当事者の方がおっしゃって。私としても使命感がすごく高まってきたわけですよね。「やっていかなきゃいけないんだ」と。

皆さんすごく同じ言葉を言っていただいて覚えているんですけども、「一筋の光ですよ」っていう。この WOH が。だから、「この光をもっと照らしていかないといけないんだ、多くの人に」と、そういう風に思ったことを本当に忘れられません。



作者：you すず me さん

ある親子との出会い

それで、第 1 回目の加害者家族の集いで、とても印象的な親子と出会って。金銭トラブルで、旦那さんが友人を殺害してしまうんですよ。殺人事件だったので、地元には住めなくなってしまって。マスコミがわーって追いかけて家の周りを取り囲んで、住めなくなりました。それで一時的に親戚とかのところに避難していたんですけれども…。

私と会ったときは、事件から 2、3 年はもう経っていました。なので、「今は何とか静かには暮らしていますけど、ここまで来るのに 3 回くらい引っ越しをしたんです」っていうことをおっしゃっていました。そして、すごくかわいい子どもがいたんですよ、そばに。まだ年齢的にそういう事件のことを分かる年齢ではなかった。なので、その子の笑顔を見るたびに、胸がチクッとしたんですね。

その親子に一体何があったかというと、まず、逮捕直後のメディアスクラム（＝マスメディアの記者が多数押しかけて、当事者や、その家族・友人などの関係者、近所の住民などに対して強引な取材をすること）ですね。これで、家族は住むところさえなくなって、親戚のところを逃げ回るような生活になった。家の壁には「人殺し」と書かれて、窓ガラスが割られたり、嫌がらせの紙がポストのところに入っていたりした。近所からも、「あなたが悪いんじゃないのは分かるけど、正直、マスコミがわーっと来て迷惑してますよ」と言われる。これは本当につらい。

お母さんとしても、なんとか子どもを守らなきゃいけないと思って、気丈に振る舞っていましたが、そういう気丈なお母さんが、ふと涙を流した瞬間がありました。それは、お子さん…当然、逮捕直後は学校に行けなくなってしまいました。ただ、いつまでも行かせないわけにはいかないので、ちょっと学校の方に連絡を取ったんですね。「転校させなきゃいけないかな」とは思ったけども、「学校がもしかしたら助けてくれるかもしれない」という期待も少しあったわけです。それで電話したところ、非常に冷たい対応で、教頭先生から「もう学校には来ないでください」と言われてしまいます。

お母さんは「仕方ないかな」と思って。その子も、しばらく学校に行けない、お父さんもいないっていう状況で、何かが起きたことは分かっているんです。だから割といい子にしてたんですね。ただ、「転校しなきゃいけない」って言ったときは泣き出したんですよ、やっぱり。お友達に会えなくなっちゃうから。そこで初めて泣き出して、「最後に友達にさよならが言いたい」ということで、お母さんは学校の方に、「ちょっとだけでいいので、さよなら言わせてください」とお願いするんですけども、「だめです」と。

それで、「行きたくないよ」「転校したくないよ」と言うお子さんをどうしたかというと、真夜中に…誰も見てない、人がいない真夜中に、校庭に連れて行って、そこでお子さんが校庭駆けまわって、「さよなら」っていうことを言ったと。

私もこのお話は何回もしてるんですけども、今でも、そのシーンを思い浮かべると、すごくつらい。大人は、責められるのももしかしたら仕方ないかもしれないけども、やっぱりそのお子さんまで…せめて、お友達にさよなら言う機会さえも与えてもらえないっていうのは、ちょっと世の中としておかしいんじゃないかと。すごく、傷つきました。

そこからですね、本当に、「こうした活動をやっていかなきゃいけないな」と、すごく心に決めたのは。その子もまだ年が 7、8 才だったので、事件のことを理解できる年齢ではなかったんですね。でも、いつか大人になったら、自分の父親が殺人を犯したということを知るときも来るでしょう。なので、もし支援をしていくんだったら、一過性のものじゃなくて、長期的にケアをしていかないとダメだなと、そのことも決意したのが、このケースです。

もうそのときの時点で、インターネット上では子どもの情報まで暴露されていました。どこの学校に通っていたとか、そういうことまで特定されていて。通学路までマスコミがいて、犯人の子どもと同い年だと思われる子どもに声掛けをしていたんですって。それで PTA は本当に怒って、学校の方に「どういうことだ」と。学校は困ったと思うんですよ。そんなに起きることじゃないし。なので、その矛先が、これは向けてはいけないけれども、やっぱり「転校してください」というようなことになってしまったと。

こうした例が、時々あります。これ、考えてください。公立の学校ですよ。明らかに憲法違反ですね。こんなことは許されないはずだけれども、加害者家族が「憲法違反だ」っていう主張はできない、やっぱり。なので、第三者が、しかも個人ではなくて組織的にサポートしていかなきゃいけない。

加害者家族は
数世代に渡って苦しんでいる

今まで、WOH でどんな事件を一番多く扱ってきたかというと、やっぱり殺人事件なんです。もう 80 件を超えました。ここ日本ですよ。日本でそんなに殺人事件起きていないんですけれども…何故そんなに相談が来るのかというと、今起きている事件に加えて、すごく前に起きた事件の加害者家族からの相談もあるんです。下手すると、私生まれてるかな、みたいなときに起きた事件も…。

そういう方がどうして連絡をしてくるのかというと…例えばその犯人のお孫さんとかが、これから結婚するというときに、「おじいちゃんの犯罪のことを、相手方の家族に言わなきゃいけないですかね」とか…この辺の相談はすごくあるんですね。やっぱり、大きい事件だと今ネット上で色々見られますよね。ある意味歴史に残ってしまっているので、それを家族が代わりに背負っているという。背負わされていると言った方が正しいのかもしれないんですけれども。

作者：sweet 苺さん

一世代だけじゃないんですよね。何世代かに渡って苦しんでいる。結構、破談になっていますよ、おじいちゃんのときの犯罪で。私たち統計を取ったんですけど、400 人くらいの加害者家族の相談データで、4 割が結婚破談を経験しています。親族の事件で。これは、重大事件だけに限りません。比較的軽微な事件でも、そういう例があります。

これは、なかなか法的な解決に持っていくのはちょっと難しい。当事者が決めることですからね。「結婚してくださいよ」って言うわけにもいかないですよね、第三者が。だから、相手の気持ちです。ただ、私すごく思うんですけども、やっぱりまだ日本では、個人というより家が重んじられていて…結婚というのも、愛する二人というよりは、やっぱり家族なのかな、というかんじがします。なので、両親の手前、籍は入れてないけれども付き合っている、っていうケースもあります。ただ、少なくとも、これまで犯罪が起きなかったら当たり前にあった形は取ってないわけですよね。それが、4 割。この数字にも私すごくびっくりしました。こういう社会でいいですかね。

それから、転居を余儀なくされる人も 4 割近い。たぶん、重大事件を多く扱っているからだと思うんですけども。でも、重大事件だけではないです。これは、報道によるんですね。

例えば、ある事件の例です。強盗だったと思うんですけど、罪名としては。強盗といっても、銀行強盗とかそういう大きいものじゃなく、店で物を盗んだっていうものだったんですけども。そのぐらいの大きさの事件が、どういう風に報道されるかというと、結構読めないんですよね。

たぶん、その事件が起きたときは、すごい世の中が平和だったんだと思います。なので、他にもっと事件が起きていたらマスコミもそっちに行ったと思うんですけど、運も悪くというかですね、カメラを持った人とマイクを持った記者の人が 2 人、アパートに近づいてくるのが、奥さんは見えたらしいですよ。で、さっき警察から旦那さんの逮捕の連絡がきたので、「あ、マスコミ来たか」と思って、居留守を使っていました。ピンポーンって鳴ったとき、ずっと居留守を使ってたんですけども、そしたら、他のところでピンポーンって鳴っている。101 から、犯人を特定しようとしてピンポーンって鳴らしていたんですって、報道の人が。

周りの人も怒るし、大家さんが家に来て、「一体どういうことだ」と。結局、その日のニュースで、そのアパートが犯人の家ということで放送されたらしいです、映像で。もう、大家さんが怒ってですね。「早く出て行ってくださいよ」と。

近所の人からも、「犯人の家ここです」みたいな張り紙が貼られたりして。結局、怖いし、引っ越しをせざるを得なくなってしまった。まだ小っちゃい子を連れているのに、逃げるように家を離れなければならなくなってしまった。

なので、必ずしも、大きい事件だけではない。小さな事件の家族でも、そうした放送の被害によって、転居を余儀なくされている。今で言う社会的制裁というものですね。

作者：りなのパパさん

加害者本人と家族では、感覚がずれる

犯罪をした本人は知らないわけですよ。家族がそういう状況になっていることを。

今、被害者の視点を取り入れた教育というものが刑務所の中で行われていて、その中で、加害者家族…英語ではよくhidden victim（隠れた被害者）とか、forgot victim（忘れられた被害者）とか、そういう表現がされていて、被害者というポジションで支援されています。で、その被害者…受刑者からすれば、迷惑を掛けた人々、のことを考えてみようと。

それで、実際に被害を受けた人がお話をすることがあると思うんですけど、刑務所によって、もうちょっと身近な家族のことも考えてみようということで、私も呼んでいただくことがあって。グループワークなんかにも参加しているんですけども、私は必ず受刑者の方に聞くんですよ。逮捕から、起訴、公判という表を作って、「皆さんどんなかんじでしたか」「皆さん今どんな気持ちですか」と伺うんですけど、やっぱりずれますね、加害者家族の感覚と。

当然、警察署とか取り調べとかも厳しいと思うので、外で何が行われているか…「家族大丈夫かな」とは思われると思うんですけども、そんなにメディアスクラムがきて、逃げて…とかっていうところまで、もしかしたら想像はできていないかもしれないですね。場合によっては、「本当に作り話じゃないんですか」って言われたこともあるくらい、なかなかちょっとイメージができない。

中の人は中の人でもちろん大変なんですけども、ちょっと言い方悪いですけど、一応3食食べられて、一応安全ではあるわけですよね、中の人は。家族は、野宿とかしている人もいるんですよ、本当に。DVや虐待に関係するところだったら、シェルターをお借りできますけど、マスコミに追われて、っていう方々のシェルターは今ありませんので。

作者：sweet 苺さん

それで、どういう風に避難していただくかというと、私たち個人のネットワークで避難してもらっているケースもあります。ただ、もちろん全部に対応できるわけではない。

それから、重大事件が優先されます。どんな軽微な事件でも「逃げたい」とは思いますけれども、周りに加害者家族だとバレる可能性が小さい事件の家族には、「ちょっと我慢してくださいよ」と。本当に追われて追われて、っていうような事件は、私たちも各地のネットワークを使って避難をしていただいています。

本当に、逮捕前後ですね。相談は、この逮捕前後、ここに一番集中しています。一番困るし、何が起こるか分からない。

（…来月号に続きます）

作者：sweet 苺さん

Lovely DAYs

以前、主人と車に乗って信号待ちをしていた時、背筋を伸ばし、膝を高く上げて、ひときわ目立って信号を渡っているおじさんを見ました。

そこで主人がボソッと、「あの人懲役行ってたな」と言いました。

皆さんも刑務所での行進を、娑婆でしないようお気を付けください！

ささきみつお コーナー

＊ささきみつお ブログ：http://ixsasaki.ti-da.net/

全力を出し尽くす

「もうだめです、これ以上できません！」

ある刑事裁判で被告人側の証人尋問の予行練習をしていた時のことである。検察側の圧倒的有利の状況の中で、弁護側も必死に証拠を集めて挽回してきた。だが、勝利するには、まだ厚い壁が立ちはだかっていた。この証人尋問が逆転勝利できるか否かの最後の決め手である。

弁護側は準備に準備を重ねてきた。検察側の反対尋問、裁判官の質問に適確に答えることができるように、あらゆる角度からの想定問答を準備した。公判期日の前日に裁判所近くのホテルの一室に閉じこもって証人尋問の予行練習をした。

しかし、証人は緊張のあまり連日十分に眠ることができず、こちらの質問に対してしどろもどろの返答しかできない。練習すればするほど、頭が疲れて、とんちんかんな発言が繰り返された。

質問している弁護側も期待する返答をしてくれないので、いらいらして疲れてきた。ただ正確に事実を証言してくれさえすれば良いのに。。。でもかなり過去のことでもあるし、事実が複雑に入り組んでいたこともあり、難しい証言内容ではあった。

「これでは弁護人の主尋問ですら適確な返事にならない。まして、検察側の反対尋問に耐えることは不可能だ。最後の裁判官の質問で完全に敗北してしまう」

万事休す！

「これ以上尋問の練習をしても意味がありません。運を天にまかせて、今夜はゆっくり休みましょう」

「いや、このままでは、これまでの努力が水の泡です。もう一回練習しましょう」

「この裁判を少しでも有利に導くために、もう一回だけやりましょう」

「かなりよくなりました。これが最後です、もう一度やりましょう」

「もう一押しです。これが最後の最後です、もう一回がんばりましょう」

「これが最後の最後の最後です。ダメ押しのつもりでもう一回、一番重要なポイントの事実についてだけやりましょう」

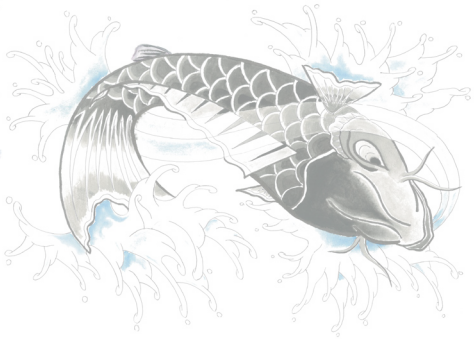
夢中になってやっていたら、部屋の窓の外が白々と明けてきた。時計をみたら朝5時だった。いくらなんでも、証人尋問の前の晩の徹夜はまずい！

時間を知ってどっと疲れが出て、私は自分の部屋に戻り、風呂にも入らず、着替えもせず、そのままベッドで寝てしまった。目が覚めたのが午前9時。あわてて飛び起きて、朝食も取らずに、聖書を読んで短く祈った。

「主よ、不十分ではありますが、とにかく全力を尽くして準備しました。これから始まる証人尋問に臨んでください。あなたが証人の口を通して証言してください、、、、、」「結果にこだわらず、全力を尽くします！」

その朝、証人の覚悟が決まった。証人台に立った証人の姿は堂々として凛々しかった。弁護人の主尋問、検察官の反対尋問、裁判官の質問のすべてに適確な回答をした。想定問答をはるかに越えた完ぺきさだった。

まさに聖霊ご自身が証人を通して証ししてくださったとしか思えない。全力を尽くしたことによって、神のみ心がなされたことを確信した。



作者：T刑Y・Tさん

「だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい」（コリント人への第一の手紙 15章58節）

「あなたは、冷たくも熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。 熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐きだそうとしている」（ヨハネの黙示録 3章15-16節）

心の相談室

はじめまして

はじめまして。雨上がりの澄んだ空気を味わいつつ、この文を書いています。

マザーハウスのカウンセリング事業担当、岩崎風水です。名前の風水は、風のように水のように生きていきたいという戒名です。戒名を使ってはいますが、宗教に対しても寛容でいたいという考えから特定の宗教は持ってません。

今回は、私自身についてと、この連載が始まった経緯を書きます。

理事長の五十嵐さんとは、3 年前の夏、日本財団の再犯防止プロジェクトで出会いました。刑務所にいたことを明かして堂々としていること、率先して出所者の生活改善をする熱意、監獄人権センターの文通業務を引き継いだことなど、生きることが精一杯の出所者が多い中、家族を持ち、出所者を支えることで生活できている人がいることに驚きました。それ以来、毎月のように、セミナーや勉強会、はたまたプライベートで顔を合わせます。去年は、共同で映画の上映会をしたり、連名で法律事務所の講師をしました。

私のプロフィールについて、マザーハウスのホームページから一部だけ載せます。

☆岩崎　風水（いわざき　ふうすい）☆

1977 年生まれ。2014 年より映画監督山際永三に師事し、未だ再審請求が認められない多くの冤罪事件や、報道被害を受けた事件の当事者やその家族からの相談を受ける。最近では、山際永三の監督する「冤罪を作り出す「取調べ」狭山事件の場合」（2016 年）の制作に協力した。

刑事施設経験者、薬物依存症、アルコール依存症、摂食障害、クレプトマニア（盗癖）、摂食障害、ギャンブル依存症からの回復者とその家族、自死遺族、被害者遺族の気持ちに寄り添うピアサポーター。

この写真は、今年の春に仮釈放者とお話をしようと、更生保護施設に出向いたときに撮影しました。写真で抱えているペンギンは、更生ペンギン「ホゴちゃん」です。ビニールに包まれているので、これを見た友人は「過保護ちゃん」といってました。袈裟を着ていますが、これは、瞑想のときに使うローブです。

私が相談員兼カウンセラーを続けている理由は、学生時代に当時の交際相手が薬物に手を出し、それを更生させようとして失敗をした経験があるからです。

当時、私は薬物に対しては「ダメ・ゼッタイ」という知識しかありませんでした。DARC（薬物依存症者のリハビリセンター）のことも知らなかったのです。私の若さと無知さゆえに、その交際相手は命を落としました。過去に救えなかった人がいる後悔が、私を突き動かします。

私が学ぶセラピーでは、これを「未完了」と言います。当時を振り返り、整合性を取り戻し、「完了」する必要があります。私自身、これを「完了」にさせるには、過去に私が味わったのと同じ苦しみを抱く者 100 名を救う必要があると考えています。もう十分と思える人の数と思ったとき、それを 100 名とすることにしたのです。

五十嵐さんとは、共通する道があり、また、異なる意見を認め合うこともあります。

再犯についても、私は「ダメ・ゼッタイ」とは思いません。出所した者が、自分の道を生き、何度も罪を犯すことを認めます。ただ、私の思いは、やはりそれぞれが罪を犯さない道を選び続けられることを手伝いたいと思っています。自身の成長のためにも、カウンセリング事業を続けさせていただきたく思うのです。

最後に、私の好きなフランクルの言葉を紹介します。

「どんな瞬間にも、人間は決断しなければならない。より良くなるために、あるいは、より悪くなるために。それが、生きてきた証となる」

未だ刑事施設にいる方々へ、たとえ死の間際でも自由はある。その選択肢の可能性に気づいてもらえたらと思います。

塀の中のたより

「少しなら大丈夫」という気持ちが自分の首を絞めた

Sweet 苺さん

いつもマザーハウスたよりを楽しみに読ませて頂いております。塀の中からの文章はいつも感心させられています。皆、それぞれ、辛く苦しい思いを乗り越えて頑張っているのだと感じる所がわかります。又、表紙や挿し絵もすごくうまくてビックリしています。

さて、、、女刑に来て半年過ぎ、同囚とも仲よく過ごせるようになったのですが、今回、同囚との不正授受で調査となり、1ヶ月、舎房単独室にてC作業をし、懲罰委員会で5日間の閉居罰となりました。同囚からの、「内緒だから大丈夫」の言葉で、私自身も、「ほんの少しなら大丈夫」と思った事から、同囚から物をもらいました。他の舎房の人もやり取りをしており、「バレなければ大丈夫」と、ちょっとの事でした。

3類から4類へと下がり、職業訓練の応募やクラブ活動への参加や通信教育も不可となり、来年4月までの類発表までの9ヶ月間は進類できなくなり、毎月の3類集会の楽しみにしているお菓子も食べられなくなり、とても残念です。

今回、自分のいる舎房より、私を含め4人懲罰になったのですが、不思議な事に外国人は同じく閉居罰を受けたのにも3類から4類に下がらずにいます。他の同囚に聞くと、「ポイントがあるから下がらないのだ」と言っていて、ちょっと私にすると不愉快でしかたありません。何故同じく罰を受けたのに、、、と。

又、事あるごとにここ刑務所では、日本人なら保護室（房）に行くような事でも、外国人の受刑者には甘く、皆、大使館に言われるのが恐いからか、日本人の受刑者と何故ここまで違うのか、疑問でいます。今回の調査では、真実が明るみに出ていません。

舎房の中でのやり取りで一番の言いだした本人が、調査にも懲罰にもなっておらず、平然と集会へ出てお菓子を食べ、介護の職業訓練へ応募しようとしているずうずうしさが腹立たしく、くやしく、そしてここの職員への不公平さに憤怒しております。

私は、調査の時の調べをした職員へ、正直にすべて話したのにもかかわらず、その本人への調査もなくいます。又、私や他の人が戻り、話をすると、その本人は他の人に「私は聞かれても絶対に言わない。私は色々やりたい事あるもんで、、、」と話をして、人に物をあげた事は認めてもおり、その上で罰を受けた私含む4人へは、「私の事を言わないでいてくれて感謝している」などと自分に都合の良い事を言っています。

又、その話を運動の時間の時、話をしていたのですが、同囚と集まっていた所に担当職員が来て、「何、終った事を話しているの？又掘りかえしたいの？又人の足を引っぱりたいの？」と声をあららげ、「ねえ、あなた達の人間関係って何なの？」と言われました。皆、本音は、もう一人いて本人も認めているのに何故そのままなのか？ほじくり出したいのではなく真実をちゃんと見極めて欲しい、只それだけなんですが、うやむやにせずこういう中途半端の状態にせず、きちんと終らせて欲しいという気持ちが皆あるし、私自身もモヤモヤして落ち着かないのはたしかです。

しかし、もうこの件は終ってしまった様で、このままです。私自身も、私に「内緒だから大丈夫」と言っていた同囚がペラペラと喋ると思ってなかった、というあっさりと裏切られたという事、そしてやはり自分が「少しなら大丈夫」という気持ちが自分自身の首をしめてしまったという事実、これから先はこのような事がないよう、そして二度と調査、懲罰にならないように、日々心がけ、頑張ろうと思いながら生活しています。

塀の中の皆々様も、同様に心がけ、一日も早い社会復帰を現実にして下さい。ここ刑務所の内での小さな親切は、大きなお世話という事をここに来てよくわかりました。

刑務所での嫌がらせ

（同じく、）Sweet 苺さん

今私は4回目の調査の身でいます。作業拒否、職員への指示に従わなかった事への反抗で調査、懲罰のくり返しをしています。話を全て書くととても書ききれないので簡単に書きますと、同囚からの執拗ないじめ、嫌がらせなどです。

Ｈさんとします。そのＨさんとは、本当に仲よく話をしたり、部屋も一緒だった事から、信用、信頼し、自分の悩みなど相談にのってもらっていました。部屋の中の他の同囚達とも仲よくしていましたし、違反的な事も皆していました。物のやり取り、本の借り貸し、ご飯のやり取りです。私はご飯が半分なので、食事のやり取りはとてもうらやましかったのですが、もらう事自体言いだせず、只、見て見ぬふりでした。というのも、大体が1番、2番手の人達で、私は7番手という下の方だったからです。

しかし、Ｈさんが、ご飯のやり取りで職員に見つかり、調査、懲罰になり、約 20 日程で工場に戻って来ましたが、その日運動の時、すさまじい形相で私の所へ来て「テメェがチクったんだろう！！」と言うのです。私は、Ｈさんが何を言っているのかわかりませんでした。私が以前、前の部屋で他の同囚が物のやり取りを職員に言った事を知っており、今回、ご飯のやり取りも言ったと思っていたのです。ご飯のやり取りは、現行犯で職員に見つかったので、Ｈさんの自業自得なのですが、私は何度も「言っていない」と言っても聞く耳もたず、その日からＨさんの嫌がらせが始りました。

部屋は違いますが、女刑は開放雑居でトイレは別にあり、トイレですれ違ったりすると、「気持ち悪い」「死ね」と言われ、私はここに来る前体重が 85 kgと太っていましたが、この一年ちょっとで約 25 kg体重が減り、急激にヤセた為、皮などがたるんでしまっています。

その体をお風呂の時にＨさんはその体を見て、「見ろよ、（Sweet 苺）、皮がたるんで気持ち悪りィ」「象の〇〇〇みたく見えるよあれ」など、他の同囚や私に聞こえる様に言い、運動の時もわざわざすれ違い、「もませ」「人殺し」など、毎日のように言われ続け、他の仲の良い同囚へ対して、「（Sweet 苺）が〇〇さんの事こう言っていた」「（Sweet 苺）の刑期は無期だから」「（Sweet 苺）の罪名はね、、、」と、今では工場内の大体の人が私の刑期など知っており、共同室では疎外され、新聞など回してもらえず、面倒な事は押しつけられる様になりました。

新しい人が部屋に入り、仲よくなり、「クリームがない」という事であげてしまったのが、今回調査の発展となりました。その人が私からクリームをもらったと他の同囚へ話をしてしまい、その話をＨさんが聞き、職員へそこで摘発され、調査、懲罰となりました。

そして2月6日、受罰明け工場への出業の時、さすがの私も「もうＨさんの嫌がらせ、暴言には耐えられそうにない」と思い、工場出業を拒否し、調査、懲罰に。2月 22 日に罰明けも同じく拒否し、調査、懲罰に。調書や弁解書には、同囚の執拗な嫌がらせ、暴言の数々、他の同囚からの無視、工場へ出業する事、共同室へ戻る事が辛いので、工場を変えてもらえないかと書くも、決定では同じ工場、共同室です。

今回、この様になる前に担当には再三申し出るも、「そのＨさんと話し合いを」という始末、小学生のケンカじゃあるまいし、したところもっとひどくなるのはわかっているのでしませんでした。

共同室では1人になれない為、トイレでずいぶん泣きましたし、タオルで首をしめた事もありますが、結局死ねず、自分が情けなく、又泣くという状態です。

審査会での通知では、「正当な理由なく作業拒否、反抗」と書かれていますが、私にすれば、「中傷され、侮辱されているからこそ出業したくなく、共同室へ転室したくない」という理由があり、所内生活の心得の中の遵守事項の中に、「他人を中傷侮辱してはならない」というのがあり、Ｈさんのしている行為はこの遵守事項の中の違反の何ものでもないのに関わらず、担当職員は私の申し出を流してしまって、結果この様になってしまいました。

私はこれから長い刑期ここで生活していきます。その間、被害者への償い、罪に向き合い改悛していく事が一番重要であり、ここに来たのもそういったものにも関わらず、今の私の精神状態は、何故無期になったのか、、、死刑になった方が良かった、、、こんな辛い思いしなくてすんだのに、死刑になって償う方が良かったんじゃないかと、死を願うようになりました。

私は、受刑者の法律はわかりませんが、刑期を過ごすのにこの刑務所内であれば、昼夜居室での作業も刑務作業ではないのか？必ずしも工場へ出業し、作業する事が監獄法で定められているものなのか？私はわかりませんが、今の私は居室内での作業を望んでおり、工場出業を拒否している状態です。工場へ出業してこのままＨさんや他の同囚達の嫌がらせに耐えているにも限界があり、今ではＨさんに殺意さえ芽ばえてきています。

（略）

銀行からの預金等の引き出し、食事の方の医務課への対応や持病対応、そして今回の調査、懲罰への解決と、このままではいつまでも私は調査、懲罰のくり返しで、全く前に進む事ができません、、、。

食事の方も、医務課へ申し出ましたところ、「食事はご飯が半分の量でそれが治療なので慣れるしかないですね。変更しません」との回答でした。糖尿病は、インスリンが分泌されずに血糖値が高くなるのを薬で補うのですが、ご飯の量を半分にすればこと足りるという治療というのもおかしな話であります。

前回お手紙を差し上げてから又3kg程体重が減り、この頃はめまいさえする状態です。ここまで空腹感をとなると、逆に気持ち悪くなってしまい、辛いです。（略）

今回、はじめてですが詩を書きました。ちょっとはずかしいですが、はじめてという事でおゆるし下さい。

感謝の毎日

おはよう　朝日と共に起きて今日１日頑張ろうと思う人でありたい

こんにちは　小鳥達が歌い木漏れ日の中で暖かく優しい人でありたい

おやすみなさい　星の瞬きと月の光の中で今日１日に感謝する人でありたい

夢みる頃　神を愛し神を敬い神に委ねる人でありたい

そして願わくば　万人の人を愛し愛される人でありたい

作者：sweet 苺さん

話3：聞6：黙1

you すず me さん

僕は、あんまり人の話聞かないし、じっとしていられなく集中力のない人だったのですが、最近は、「なんでこの人こんなこと言うのかな？」「どういう意味で言ったんだろう？」と気になって考えるようになりました。

人の話を聞いて考えるようになってから、相手の事も考えるようになりました。「人によって人は変われる」と言いますが、誰かがいるからその誰かを思いやれ、その誰かの為に頑張れるんだと感じました。

人間の耳って何で2つあるか考えたことありますか？

口は1つで耳と目は2つあるのは、しゃべるよりも、人の話もその倍聞け、そして物事・相手（本質と本心）をしっかり見ろってことだそうです。何かの本に載ってました。確かその本には、「話す3割、聞く6割、沈黙（考える）1割」って書いてあったかな。これは大切なことだと思いました。

マザーハウスたよりに投稿することは話すこととすると、人の投稿などたよりを読むことは、人の話を聞くこととなるのではないでしょうか？

毎月、皆さんの意見が聞ける、自分の投稿に対する意見があるか楽しみです。

刑務所に来て、自分自身に何が欠如しているか分かった

Y 刑　T・T さん

私の何が特に足りないのかは、刑務作業や部屋での仕事を通して理解する事が出来ました。脳科学で捉えてみると、前頭葉、扁桃体、海馬といった臓器に障害があるわけではありません。各臓器に通じる「コネクティブ」に欠陥や障害があります。

「コネクティブ」の意味は、携帯電話で例えると、本体を充電する時、充電器を壁にあるコンセントに差し、コネクターを本体に差すと赤いランプが付き充電され、満タンになると本体は使用する事が出来ます。私の場合は、本体、充電器、壁部コンセントには問題はないのですが、本体と充電器の間のコネクターがずれていたり、壁部コンセントがしっかりはまっていない状態です。（略）

衛生係の職に就いてみると、約 40 人の称呼番号と名前はすぐに覚えたし、工場番号や部屋番号の大半は覚えている為、業務の効率化にはとても役立っています。しかし、先生や同囚に何か突発的な事を依頼すると、その行為は出来ますが、それまでにやっていた事が飛んでしまい、中途半端な状態になってしまい、怒られてしまいます。

昼食時、皆の配食をしますが、毎回、炊場から来るおかずの量が微妙に違い、前回の量の感覚で配食すると当然、バランスがおかしくなり、何度も調整するので遅くなり、他の担当者からも注意や指導をされてしまいます。

カレーを配食する時は、世の中では普通に「おたま」ですくうと思いますが、刑務所の配食は平等にする為、具のみを別の碗に入れ、肉、ニンジン、ジャガイモをスプーンで分け、その後、スープを均等に入れます。そこまで努力しても、「肉が少ない」だとか「ニンジンが多い」だとか文句を言う人が非常に多くて苦労しています。

その人々の言い分は「配食係という役職だから、均等にやる事は当然だ、食い物の恨みは恐いと昔から言うだろう」と、一見、真っ当な意見なのかもしれませんが、私からしてみれば、「だったら配食をしてみて苦労を感じろ」と心の中で思っています。（略）

受刑者の多くは、自己肯定感、自尊心、自己愛が満たされていない気の毒な人々です。他者のアラを探し、つついて、指摘し、人の上に立ち、コントロールし、自己満足をしようと感じている印象があります。しかし、自分自身は何も変わっていない悲しく寂しい人々です。

私自身は、刑務作業を通して、自分が足りなく欠如している、コネクティブの機能障害や機能不全を修正し、コネクティブを他の臓器と上手く繋がるように努力します。そして、非認知能力（＝IQ（知能）とは関係なく、意欲・勤勉性・協調性・粘り強さ・忍耐力・精神的安定性などの個人の特性のこと）といった社会性を成長させていきたいと考えています。

作者：sweet 苺さん

炊場担当者が調理した食事について

（同じく、）Ｙ刑　Ｔ・Ｔさん

担当先生から、「ラーメン次郎仙台店の店長のブログ」について話がありました。
「初めて来た客が、大盛、野菜、ニンニク、油増々で注文したが、あまりに多すぎて食べられず、店長に対して『こんなラーメンまずい』と言って、店長も『もう二度と来るな』と言い返した。この意見に賛否両論あり、ネットは炎上した」という話をして頂きました。

私は、約 10 年前のある出来事を思い出しました。
当時、友人から、「ラーメン次郎が話題になっているので一度試してみるように」と口コミがありました。その時は今とは違い、一部の人々向けで、どちらかといえばマニア系でした。（略）何が良く、何が悪いのか分からなかったので、（略）周りの人々と同じように「野菜、ニンニク、油増々」と言ってみました。
待つ事数分、想像とは全く違うフォルムのラーメンで驚愕しました。常連客と店主の話を聞いていると、創業者の社長のようで、頑固風なオヤジでした。「無理してでも食べなければ」と頑張りましたが、半分程度残してしまい、お碗を一つ上の段に置いて「ごちそうさま」と言って店を出ましたが、店主の目が恐かった事を思い出しました。
それからＳ区の支店にはよく行っていましたが、その時は必ず「麺半分、野菜増々、ニンニク入り」と自分の腹八文目でおいしく頂けるように注文するようにしていました。

最近、立ち仕事の為、Ａ食になり、ご飯が増えましたが、昼食は残さず食べています。しかし、朝夕食時は残す事がよくあります。この料理は炊場担当者が一生懸命作って頂いているのだと改めて考えさせられました。
これからは少々無理してでも、残す事はもったいないので、全部食べられるように努力しなければならないと、「ラーメン次郎」での体験を通して感じる事が出来ました。

育児日記

＊「Ｉ君だと、数字の1と紛らわしい」とのご意見をいただいたので、今回から、Ｉ君をＡ君と表記させていただきます。

Ａ君とＫちゃんと三人で公園で遊んでいる時、泣きながら歩くＫちゃんに、私が「こっちにおいで」と歩く練習をしていたら、Ａ君が「まま、Ｋちゃんないてかわいそうだからやめよう」と言ってきました。相手を思いやる気持ちが芽生えたと思って感動しました。
Ａ君は、Ｋちゃんにおもちゃを貸したり、キスをしたり、Ｋちゃんのことが大好きなので、とても嬉しいです。

Ｋちゃんは、転んで頭をぶつけると、手で頭を押さえて「いたい」と言うようになりました。そしてとっても面白い時に「ケケケッ！」と笑います！

作者：you すず me さん

風の配達する手紙（4）

服部　剛（詩人）

皆様、こんにちは。今日は梅雨の晴れ間で初夏のような陽気です。窓外の風景を眺めると、いつもの通りにバスは走り、歩行者の信号が青になると、人々は横断歩道を渡り、それぞれの目的地へと、歩いていきます。

人間はどこにいても＜目的地＞を持つことで、生きてゆくことができるのでしょう。僕は今、こうして、お逢いしたことのないあなたへ手紙を書きながら、あなたが晴れの日の日常へ復帰する日を目的地として、心に小さな命の光が灯りますように――と強く、祈っています。

私は、日々の些細な出来事に、すぐ心が揺らいでしまいますが、時が来て、日常に戻るあなたの小さな炎は、晴れの日と雨の日をくぐりぬけて、揺るぎなく輝いてゆく可能性を秘めている気がします。

聖書の中で、キリスト教徒を迫害していたパウロが、イエスの霊の光と出逢い、回心（神様の道に心を向けること）した次元と同じ次元の道が、きっとあなたにも準備されているでしょう。

すべての人の魂には、体の無い神様から一人ひとりに託されている賜物（たまもの）があります。皆様へ密かな導きがありますように願いつつ、私の詩を贈ります。

花の名前

あなたは一体
何処から来たのでしょう？

あなたは、あの日
たった一粒の種でした

一粒の種の中には
「他の誰でもないあなた」という設計図が
小さく折り畳まれ
ぎゅっ と、
詰めこまれています

母なるものに温められた
一粒の種は、やがて発芽し
（おぎゃあの産声をあげ）
ゆっくり…あなたになってゆく

いつのまにか大人になった、あなたの中に
今もくっきりと埋まる
小さな種は
膨張し続ける無限の宇宙を孕みながら
これからも
殻を蹴破りぐいぐいと
緑の茎を、空へ
何処までも伸ばしてゆくでしょう

未知なる、あなたという花を

作者：T 刑 Y・T さん

事業部フランシスコより

書籍など、一度に 30、40 冊注文される方がいらっしゃいますが、新しい注文が次々と入ってくるため、お控えくだされば有難いです。よろしくお願いいたします。

作者：A 刑 M・S さん

ご寄付ありがとうございます！

5 月 16 日～6 月 15 日の寄付金

合計：564,592 円

（内　愛のプリズム宣教基金：69,000 円）

作者：sweet 苺さん

行事予定

▼7/16　10：30～11：30
中和田カトリック教会にて、講演会

▼7/19　18：00～
龍谷大学にて、
APS（アフター・プリズン・サポート）研究会

▼7/20　14：30～
早稲田大学 10 号館 103 号室にて、講義

▼7/22　13：30～
聖イグナチオ教会内 岐部ホールにて、VIP プリズム
講演テーマ「当事者の叫び」

▼7/25　18：00～
ワーカーズ・コープにて、勉強会

▼7/30 日　10：30～
カトリック東仙台教会にて、講演会

▼8/2 日　10：00～
仙台教区事務局にて
平賀司教・小野寺神父と面会

編集後記

皆さま、こんにちは。いつもありがとうございます。

今月号では、縦横ともに文字数を少し増やしました。
また、「タイトルはどんな風にしたら見やすいだろう」と考えて、本屋に並んでいた雑誌を何気なく開くと、気がつきました！「文字の色を変えれば良いんだ！どうして今までやらなかったんだろう」…ということで、早速実践です！

イラストを送ってくださった方、大変ありがとうございました！とても助かり、嬉しいです！！引き続き、大大大歓迎です！
それでは、来月号もお楽しみに！

マザーハウスたより 編集局

定期的にコーヒーを購入し、販売してくださっている教会・修道会（順不同）

＼こちらでもお求めになれます。／

カトリック茅ヶ崎教会
カトリック北仙台教会
カトリック所沢教会
カトリック中和田教会
カトリック布池教会
カトリック東山教会
カトリック浜松教会
カトリック新子安教会
カトリック菊名教会
カトリック碑文谷教会
カトリック東仙台教会
イエズス会日本殉教者修道院
カトリック足利教会
カトリック神田教会
カトリック松戸教会
日本カトリック神学院
カトリック戸塚教会
カトリック桃山教会
（平和環境部）
カトリック大分教会
カトリック西千葉教会
カトリック下井草教会
カトリック元寺小路教会
ドン・ボスコ社

ご協力ありがとうございます

マザーハウス×きしゃぽん古本募金

書籍・DVDを寄付していただくと古本募金になりマザーハウスに還元されます。詳細はマザーハウス×きしゃぽん係にお問い合わせください。

TEL 0120-29-7000
送り先 〒358-0053
埼玉県入間市仏子916

便利屋サービス《ラウレンシオ》

良心的価格で不用品処理、遺品整理、掃除などを真心こめてさせていただきます！もちろんお見積もりは無料です。この事業は「出所者の就労支援事業」の一環でさせていただいております。収益の一部は、出所者の更生改善と社会復帰支援事業に充てられます。

連絡先 080-4614-8508
FAX 03-6659-5270
MAIL lawrance@motherhouse-jp.org

★ラウレンシオとは３世紀にスペインで生まれ、料理、掃除等の下働きの中に神の臨在を見、歓喜した聖人。

ルワンダ・コーヒーの栽培は、1,300～2,200メートルの高地栽培、昼夜の寒暖差と豊富な雨量に恵まれた天候、肥沃な火山灰質の土壌、パーフェクトな生産環境で天塩に掛けて有機肥料を使用した栽培で行われています。豆は手で収穫され、完全洗浄、天日乾燥を経て、一粒、一粒、手で選別されます。それらの丁寧な作業が、ルワンダの大粒で美しいグリーンビーンズ（生豆）“アラビカ種ブルボンマヤゲイス”を生みだしています。

社会貢献

この商品は全て出所者が製造から販売に携わっており、収益金は全て受刑者の更生と出所者の社会復帰支援及び施設建設資金等に使用させて頂きます。

マリアコーヒー購入について

ご購入の申し込みやお問い合わせはFax、メールにてお受けいたします。

送料別

- 200g［粉・豆］……¥900
- カフェドリップ（一人用）10g ……¥100

FAX 03-6659-5270
MAIL maria_coffee@motherhouse-jp.org

マザーハウスへのご支援は下記の通りです。

★ 郵便振替口座　00170-0-586722
★ みずほ銀行 新宿支店 普通口座 2376980
口座名：特定非営利活動法人 マザーハウス
トクヒ）マザーハウス

- 正会員（年会費）…… ¥5,000 × 1 口
- 賛助会員 …… ¥3,000 × 1 口
- 社会復帰支援 …… 寄付

―マザーハウスたより７月号 ―
発行責任者／五十嵐 弘志　2017年7月15日発行
〒130-0024 東京都墨田区菊川 1-16-17-102
info@motherhouse-jp.org
http://www.motherhouse-jp.org
https://www.facebook.com/v.t.nicolas
http://www.facebook.com/motherhouse1964
TEL 03-6659-5260